

＜三富新田と武蔵野の開発＞に参加して

傍島 夏生

武蔵野台地の今昔を、国木田さんのご案内により見聞しました。

「三富新田には田んぼはないの？」なんて無知をさらしながら、早春の一日を楽しく歩きました。その後、いずれも江戸時代に開発された「見沼たんぼ」と「玉川上水」を訪れる機会がありました。あらためて三富新田を振り返り、

- ・ 三富新田開発の背景
- ・ 水をめぐるあれこれ
- ・ 景観(開拓地割跡)は保てるのか

以上の3点について勝手な考察をしてみました。

1. 三富新田開発の背景

三富新田の開発は1694年、川越藩主の柳沢吉保(以下、吉保という)の命によりわずか2年という短期間で成し遂げられたとされる背景と、その後をたどってみました。

当時の江戸は人口が急増し食料対策として新田開発が進められ、水田の開発適地が少なくなると台地も開発(畑)の対象になっていきました。開発前の三富は秣場(入会地)でした。新田開発で秣場を失った周囲の村々も利用に加わり、利用をめぐって殺人事件までおこるほど争論が絶えませんでした。その武蔵野秣場も新田開発が計画されました。そこで争論解決と新田開発の実現のために「吉保が川越藩主となる→武蔵野秣場は川越藩の領地との裁許→三富新田開発の命」のステップがふまれたのです。川越藩による事前の測量実績も用意周到な準備のひとつであったのでしょう。いずれにせよ五代将軍綱吉の側近として幕府政治を掌っていた吉保だからこそ出来たことだったのです。

では、厳しい自然条件(土・水・風)が揃う開拓地の入植者はどんな人々だったのでしょうか。それは厳選された農家(農夫)でした。現残する入植証文によると、入植者の条件として「家・食料・開墾に必要な農具・牛馬は自前であること、出身村有力者の保証人があること」とされています。即ち、すでに自立できる基盤を持ち信用がある者であることが求められたのです。当時の家督相続人は通常は長男でしたから次男・三男たちには厳しすぎる条件だったことでしょう。数少ない情報をつなぎ合わせると、ひとつのケースとしておおよそこんなことが推測されます。「農家の隠居が保有の土地を長男に引き継ぎ、新天地の開墾に必要な物資とともに次男(とか三男)を連れて入植する。こうすれば田分けすることなく次男(とか三男)も土地が得られ、隠居の経験豊富な知識や知恵は入植地でも生かせる」という実に名案だったのです。勿論そのほかのケースもあったはずですが、確たる記録には辿り着けませんでした。入植証文にはさらに、「宗教のことや鉄砲を所持しないこと」があるほか「生類に慈悲をもって接すること」とあるのはいかにも「生類憐れみの令」が発せられていた時代ならではです。つまり入植者は問題を起こすことなく三富に根付くことを誓うことでした。

2年という短期間というのは開発の命から地割が済み検地が終了したまでのことで、入植者の苦労はここからです。「広大な土地が無償で手に入るうえ、入植後5年間は免貢」を励みに、樹木は幼木から育て萱野を掘り起こし、過酷な自然条件のなか開墾に励んだのです。当初の収穫物はア

ワ・ヒエ程度だったとされています。幼木が成長し林になり、萱野が畑となるには数十年を要したことでしょう。救世主となったサツマイモが栽培され始めたのは入植してから約60年後のこと、本格的に栽培され農家として安定していったのは入植してからおおよそ100年後のことだったようです。

2. 水をめぐるあれこれ

三富新田開発での大誤算は三富用水工事の失敗でしょう。水は用水路の途中で地中に吸い込まれていったのです。当時の三富新田図には用水路が引かれ橋が掛けられています。今でも用水路の遺構が出るそうです。この用水路に水が流れることはなかったのでしょうか。

さきの入植証文には「井戸を掘ること」もありますが、用水工事が失敗したから加わった条件ではないでしょうか。井戸は深さ20mにもなる深井戸で三富新田全体でも11ヶ所しかなく、1本を約15軒での共同利用でした。枯れることあり数km離れた柳瀬川への水汲みは子供の仕事だったそうです。現存する深井戸のいくつかは今でもポンプで汲み上げ農家で利用されているそうです。

面白い話を耳にしました。樹木が水を引き寄せることは常識とされており、多くの開発地には植林がなされたそうで、困難な三富用水をあきらめ樹木が水を引き寄せるという自然力の期待に切り替えたのでは・・という説です。現在の地下の水位は当時よりかなり上がっているそうです。

茅湯(カヤユ)」という言葉が残されています。所沢の市街地に住む農家の人の話です。「終戦後に所沢に入植した。ほかにも入植者はいたが皆よそに移っていった。理由は水。飲水にも不自由するところで当然風呂にも入れなかった。原っぱでススキの穂をいっぱい摘んできて風呂桶にいれ、それで体を拭いていた。自分もよほど出て行こうと思ったがぐずぐずしていたら鉄道が通り、あっという間に宅地開発が進んで資産家になってしまった」。また昭和30年代としての話です。「一週間に一回程度、家の外に衝立をたて沸かしたお湯で体を拭いた。一番困ったのは新婚のお嫁さんだった。残り湯は肥料場に撒き一滴も無駄にしなかった」。

3. 景観(開拓地割跡＝屋敷林と耕地と平地林)は保てるのか

開拓地割跡の景観がよく残っているのは奇跡的に思えました。その要因を考えてみました。最大の要因は鉄道が通らなかった地域が高度成長期の開発から取り残されてきたのでは、と考えましたが逆でした。都市化を望まなかった農家が鉄道の開通に反対したのです。

開拓には過酷な自然条件は、水害や土砂崩れの災害が発生しにくいという利点でもあったのです。稲作が廃れていく今となれば水田になれなかった土地だったことも幸いしたとは皮肉なことです。また三富の農業を安定させたサツマイモも結果として景観保全に貢献してきたと言えるでしょう。

今、三富の農業を幾代にもわたり守り続けてきた農家に立ちはだかっているのが相続問題です。高騰した土地の相続税は高価で支払うには土地の切り売りか物納をするしかありません。そして法律通りに相続人に資産分けすれば今の景観は保てないばかりか、自然を利用した循環型農業も維持できなくなるでしょう。まだ景観をよく残しているといわれる上富地区でさえその様を変えつつあります。

高齢化と相続問題に直面する農家、循環型農業を讃える人、環境保全を訴える人、税金が欲しい国、大規模な住宅・商業開発を狙う業者・・・利害を超えて解決に知恵を絞らなければならない。そのキーワードは持続可能なことではないだろうか。

感想文を手がけるにあたり少し調べるつもりが、いくつかの書物を読むことになり、ダンボール箱に眠っていた「怒る富士(新田次郎)」までも引っ張りだすことにもなりました。疑問は広がるばかりで三芳町立歴史民俗資料館を再び訪ねました。

感想文というには外れた内容になってしまいましたが、講座を企画・実施して下さった幹事の皆さま、勉強のきっかけまで与えていただきました。ありがとうございました。